

118 ART PAPER

2021 WINTER

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS



ティナ・モドッティ《操り人形のルネ・ダルノンクール》1929年 ゼラチンシルバー・プリント 名古屋市美術館蔵

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

発行

名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>
休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始
開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆

井口智子(I.)、勝田琴絵(KK)、久保田舞美(mm)、
竹葉丈(J.T.)、角田美奈子(み。)、保崎裕徳(nori)、
星子桃子(☆)、森本陽香(haru)
岡田和奈佳

デザイン

印刷
発行日
2021年12月1日



Nagoya City Art Museum

特集 マリオネット、メキシコを行く。——三人のアメリカ人の出会いとその後の物語
操り人形

連載「美術館そして私——80年代からミレニアムへ」山本富章

収蔵作家紹介「樋田伸也」

EVENT「生誕160年記念 グランマ・モーゼス展 素敵な100年人生」

展覧会現在進行形「ゴッホ展——響きあう魂 ヘレー・ネとフィンセント」COLUMN「オンラインで楽しむ名古屋市美術館」

REVIEW「ジブリの大博覧会～ジブリパーク、開園まであと1年。」、「飽きと知性」

操り人形 特集 「マリオネット、メキシコに行く。」——三人のアメリカ人の出会いとその後の物語

名古屋市美術館の所蔵作品《操り人形のルネ・ダルノンクール》(表紙絵)には、1920年代半ばにメキシコに引き寄せられた三人のアメリカ人の出会いとその後正しく運命に“操られる”ような生涯を歩んだ彼らの物語を読むことができる。

写真を撮影した人

写真を撮影したのはティナ・モドッティ(Tina Modotti, 1896-1942)。イタリアからの移民として1913年にサンフランシスコに移住、その後結婚し、映画女優として数本のハリウッド映画に出演していた彼女の人生が大きく動いたのが、1921年の写真家エドワード・ウエストン(1886-1958)との出会いであった。1923年7月、二人は国境を越えて“駆け落ち”、メキシコでの二人の写真撮影が始まった。

だが、二人の間にはやがて「すれ違い」が生じ、1926年11月、ウエストンはアメリカに戻ってしまう。残されたティナは単独で取材と撮影を続け、対象に寄せる情感をも感じさせる独自の写真表現を確立していった。

さて、ティナ・モドッティが撮影した写真にはマリオネットに“話しかけられる”ようにメキシコの民芸品である鶴の置物が配されている。この時期メキシコの文化、特に民芸品がアメリカの文化人によって見出された。ウエストンとティナが撮影、写真を提供していた雑誌『MEXICAN FOLKWAYS』はその啓蒙と情報の典拠となり、同誌に掲載された写真はアメリカ人がメキシコに対して抱いたある種のエキゾティズムを増幅させた。言わば、アメリカのモダニズムによりメキシコの民芸品に素朴が“再発見”され、モダニストたちはその素朴のなかに新たな造形要素を“再認識”したことになる。

fig.1 「Mexican Popular Arts」
フレデリック・デイヴィスのギャラリー広告
出典: MEXICAN FOLKWAYS, Vol.7 No.3
(1932年7-9月号)

化、特に民芸品がアメリカの文化人によって見出された。ウエストンとティナが撮影、写真を提供していた雑誌『MEXICAN FOLKWAYS』はその啓蒙と情報の典拠となり、同誌に掲載された写真はアメリカ人がメキシコに対して抱いたある種のエキゾティズムを増幅させた。言わば、アメリカのモダニズムによりメキシコの民芸品に素朴が“再発見”され、モダニストたちはその素朴のなかに新たな造形要素を“再認識”したことになる。

「メキシコの御土産」を数多く扱っていたのが、メキシコ・シティにあったアメリカ人ディーラー、フレデリック・W・デイヴィス(1877-1961)のギャラリーであった(fig.1)。民芸品とスペイン植民地以前の美術工芸に興味があったデイヴィスは、革命(1910-1920)期に市場に出回った骨董品を収集し、革命後に社会が安定し、アメリカ人の間でメキシコが注目されるようになると、彼のギャラリーには観光客はもとより、多くのコレクターが集まるようになった。事業が軌道に乗り始めた1927年、デイヴィスが“目利き”として雇ったのが、“人形になった人”ルネ・ダルノンクールであった。

人形を作った人

ダルノンクールの操り人形を制作したのは、アメリカ人画家ルイス・ブーニン(Louis Bunin, 1904-94)(fig.2)。ロシアで生まれたブーニンは、子供の時に両親とともにアメリカに移住、シカゴのアート・インスティテュートで絵画を学んだ後、1925年にパリに渡り制作を行っていた。1928年、ブーニンはディエゴ・リベラによるメキシコ・シティの大統領宮壁画《メキシコの歴史》の制作助手を務めるため、メキシコに赴いた。リベラの下で助手として壁画制作に携わりながら、彼が手掛けたのが人形劇であった。

メキシコでは人形、特に操り人形が庶民や子供のための娯楽や教育のために採用され、メキシコ・シティには人形劇専用のテント小屋があり、「ガダルーペの聖母」等カトリックの奇蹟譚を一日に数回上演していた。ブーニンは自ら人形を製作し、脚本を書き、そして人形を操作した。翌1929年にはカラ・デル・エスティディアンテ・インディヘナに於いて、メキシコ人学生に人形

劇を指導、上演を行っている。ブーニンが上演を目指したものは、ユージン・オニール『毛猿』等、政治的な劇であった。

1929年の秋、ティナはこの若きアーティストと出会い、彼と彼が演出する人形劇の舞台を撮影し始めた。それらの写真作品にはブーニンが操り人形劇をとおして民衆に伝えようとした意図や、さらには操り人形に込められた人生や運命についての隠喩までもが描写されている。

そして、メキシコでの人形劇への取り組みがルイス・ブーニンのその後の人生を決定することとなった。

人形になった人

ルネ・ダルノンクール(René d'Harnoncourt, 1901-68)(fig.3)は、ウィーンでフランス貴族の家系に生まれた。ウィーンの大学で化学を専攻し、科学者を志した彼の人生が大きく変動したのが、1924年であった。オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊により、ダルノンクール家の財産はチェコスロバキア政府により没収され、彼の“約束された”将来は変更を余儀なくされた。1925年、ダルノンクールが思いついたことは、ウィーンで貧困の下に生活するよりも、どこか“新天地”に移住することであった。デューラーの版画やリルケの詩集等、自身のささやかなコレクションで渡航費を捻出した彼はアメリカを目指したが、前年1924年の移民法によりアメリカへの入国が制限されたことを知る。1926年1月、ダルノンクールが到着したのはメキシコ・ベラカルス港であった。彼は生涯に亘って六か国語に堪能であったが、その時点では英語もスペイン語も話すことはできなかった。そうした言わば“行き当たりばったり”的「科学者」にメキシコでの職などあるはずもなかった。それでも「芸は身を助く」とはよく言ったもので、同地で彼が生活の糧を稼ぐ手段としたのが、絵を描く才能であった。旅行者向けの絵葉書や闘牛のイラスト、懐中時計の蓋のデザイン、さらには商店のショーウィンドウや薬局の看板まで手掛けたという。こうした請負



fig.2 ティナ・モドッティ《ルイス・ブーニン》1929年
出典: Margaret Hooks, TINA MODOTTI: Photographer and Revolutionary, Pandola, 1993, p.202



fig.3 ルネ・ダルノンクールのメキシコ入国(移住)書類
(部分) 1930年

出典:Michelle Elligott, *René d'Harnoncourt and the Art of Installation*,
The Museum of Modern Art, New York, 2018, p.14

リベラやオロスコ、さらにはルフィーノ・タマヨの作品を展示紹介している。

1929年、それぞれの選択

彼ら三人のメキシコでの活動に深く関わった人物がいた。アメリカ合衆国メキシコ大使ドゥワイト・W・モロー(1873-1931)とその妻エリザベス(1873-1955)であった。メキシコ領土内の石油と土地を巡るアメリカとメキシコとの緊張関係解決のために1928年に大使としてメキシコ・シティに派遣されたドゥワイト・モローは、独自の「善隣政策」を発揮、メキシコのフォーク・アートの展覧会を開催すべくメキシコ政府に働きかけ、同時にピッツバーグのカーネギー財団からの資金援助を取り付けた。展覧会についてはモローからの強い推薦を受けたダルノンクールが企画監修に当たることになった。同展覧会はメキシコ・シティの教育省で「御披露目」された後、翌1930年10月にニューヨークのメトロポリタン美術館で開幕、その後1932年にかけて全米14か所を巡回することになる。

またこの時期モロー夫妻は、ケルナバカにあった大使公邸にダルノンクールに壁画の製作を依頼している(同年末、モローは同地のコルテス宮殿の壁画制作をリベラに依頼、翌1930年に壁画《征服、独立そして革命》が完成している)。

一方、妻のエリザベス・モローはルイス・ブーニンに対し資金援助を申し出た。彼女が政治的な演目を上演しないことを援助の条件に挙げると、ブーニンは即座にその申し出を断った。それでも彼女は、舞台装置を持たず壁に自ら直接背景を描いていたブーニンに対して、三つの人形劇のための製作補助を再度提案、その費用によってカーテンと背景を持つ舞台と照明器具とともに、ルネ・ダルノンクールの操り人形が製作された。

《操り人形のルネ・ダルノンクール》が撮影されてまもなく1929年12月、ティナ・モドッティは初めての個展を国立図書館のホールで開催している。展覧会の最終日に当たる12月14日には、画家のシケイロスによる講演「メキシコにおける最初の革命的写真展」が行われた。その日が写真家ティナ・モドッティの絶頂となった。

だが明けて1930年、彼らを取り巻く情況は一変する。2月5日、メキシコ大統領に就任したばかりのパスクアル・オルティス・ルビオが狙撃された。この大統領暗殺計画に共謀したとして、ティナは逮捕され、13日間に亘り拘留された。メキシコに留まる条件として革命思想を放棄することを命じられたが、それを拒否した彼女は保釈後、「国外追放」を命じられる。彼女に対してドゥワイト・モローは、政治活動の中止を条件にアメリカへの入国ビザの発給を認可しようとしたが、彼女はその申し出をも拒否してしまう。デイヴィスの店を訪れ、別れを告げた後、彼女はベラクルス港へと向かう汽車に乗り込んだ。最後に彼女を見送ったのはメキシコ人写真家マヌエル・アルバレス・ブラボー(1902-2002)だった。

の仕事の中で、ダルノンクールはアメリカ人旅行者がメキシコの骨董品を探し求めていることを知り、それを手伝うことに新たなビジネスを見出した。美術品を求めた彼の旅行は、この年1926年内でメキシコ全土28州に及んだ。

1927年のフレデリック・デイヴィスとの出会いはダルノンクールに新たな活動を与えることになった。メキシコ国内を駆け巡り骨董品を調査、収集、売買するばかりでなく、体系的、あるいは編年的に分類し、さらには現代美術の作家との交流が始まつた。同年、ダルノンクールはデイヴィスの店で初めての展覧会を企画、

ティナがメキシコを離れて二か月後の1930年4月、ブーニンがメキシコを去っている。

それから10年

1939年4月19日、ティナ・モドッティはベラクルスの港に到着、再びメキシコの土を踏む。「国外追放」から10年、その間ベルリン、モスクワ、パリに滞在し、その後ファシズムに反抗する義勇組織の一員としてスペイン内戦に参加するも敗走、「亡命者」としてメキシコに戻った彼女は、再びカメラを手にメキシコの芸術と工芸、そして民衆の生活を取材することを目指した。だがそれらの作品が発表されることではなく、1942年1月5日の夜、メキシコ・シティを走るタクシーのなかで心臓麻痺により死去する。

一方、アメリカに帰国したブーニンはメキシコで手掛けた人形劇から動画へと展開していく。1939年にはニューヨークで開催されたワールドフェアにおいて三次元の人形アニメーションを発表、その後数本の人形アニメを制作し新たな表現分野を開拓するも、マッカーシズム(反共運動)による弾圧を受け、解雇されている。1949年には映画『不思議の国のアリス』の製作にアニメーションで参加するも、同作品はウォルト・ディズニーの介入を受ける(ディズニー社は1951年全編アニメーションによる映画『ふしぎの国のアリス』を制作し、公開している)。ブーニンが参加製作したフィルムは永らく所在不明となっていたが、その後12分の追加分も含めて再編集され、ニューヨーク近代美術館(MoMA)で上映、先駆者としての彼の業績が再評価された。

ダルノンクールは1931年から翌年にかけて前述の展覧会「メキシコの美術」のため、1200点にも及ぶ出品作品とともに全米14か所を巡回、旅行している。アメリカとメキシコを往復し、各地の美術館の館長や学芸員、理事達と出会うなかで、やがて彼はアメリカへの移住を決意する。

1931年にはニューヨークのギャラリーで自らの素描による個展を開催、また二冊の絵本『壁の穴(The Hole in the Wall)』と『メキシカナ(MEXICANA: A BOOK OF PICTURES)』(fig.4)を出版、刊行するなど、充実した日々を過ごしていた。1932年にメキシコを離れたダルノンクールは、オーストリアに一時帰国した後にアメリカに移住、ニューヨークに於いてラジオ番組「Art in America」を監修する一方で、アメリカ原住民のフォーク・アートの調査を行い、その成果を1939年から翌年にかけてサンフランシスコで開催された万博で展覧会として開催している。また、同年にアメリカの市民権を取得すると、1941年1月にはニューヨーク近代美術館(MoMA)に於いて展覧会「アメリカ先住民の芸術」を開催、そして1949年から1968年まで20年に亘り同館の館長を務める等、アメリカのアート・シーンを牽引してきた。

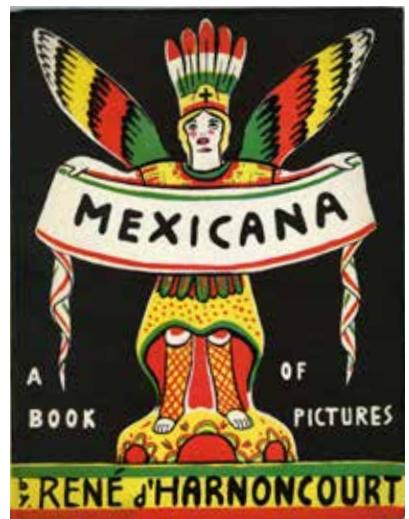


fig.4 ルネ・ダルノンクール(画・文) 絵本『メキシカナ』(表紙) 1931年

挫折と成功、対照的なその

後の人生を歩み、二度と巡り合うことがなかったティナ・モドッティとダルノンクールには二人の死後、思いがけない“縁”があった。

1995年9月、アメリカ・フィラデルフィア美術館でティナ・モドッティの初めての本格的な回顧展が開催された。マルセル・デュシャンの作品と映画『ロッキー』で一躍有名となった美術館で展覧会を実現させた人物は、同館館長のアン・ダルノンクール(1943-2008)、ルネ・ダルノンクールの一人娘である。(J.T.)

NYUから紹介された英語のチューターLynneに会った時「I must swim in English sea in NY」と話すと「OK, I will teach you how to swim in this city」の返事。その後しっかりと鍛えられた。

地下鉄W4駅からほど近い改修したての住居兼スタジオに入居してみると、短い通りにはレストランやカフェが並んでいた。ZITTO'Sという美味しいパン屋で2日に一度焼き立ての全粒粉パンを買っていた。W4は便利で、JFKエクスプレスならば空港にダイレクトに行くことができ、NYの地下鉄で不安を感じたことはなかった。休みを利用してNYに来る学生にはJFKからこのエクスプレスでW4まで来るよう伝えた。自然史博物館で、私が提示したNYUのカードは彼らも無料だった。ギャラリーガイドを調べ、SOHOやアップタウンの展覧会で気になる作家の作品を見ることにも時間を割いた。

面識があった桑山忠明氏のスタジオには早くからお邪魔しあ世話になった。年末のパーティーで内装をしている知人を紹介され「制作材料をプリンスランバー（材木店）で買うなら私の名前を出してみてくれ」と名刺をもらった。チューターのLynneと一緒に制作用資材を手に入れるべくプリンスランバーに出かけると現金のみだと言われたが、彼の名前を告げると小切手でOKとなった。「すごい」とLynneは驚いた。

桑山氏は日本画の因習に嫌気がさし自由（freedom）を求めNYに来たとかねがね語っていたが、作品の見極めは「one second」と断言していた。出合った瞬間に何かきらめくものがなければ作品たりえない。その後、時間が経っても消えることがないものこそ本物ではないかと語っていた。50年代末の抽象表現が最盛期の場で日本画材を用いてミニマルな表現から出発した氏は、様々な表現を目撃していた。「ロスコの絵は今より鮮明で、絵具の顔料そのものを見ていくような鮮やかさがあった。今見ているものは残りかすではないか」とまで言った。それは岩絵の具を知る画家の眼が捕えた紛れもない実感が言葉になったものだと思う。

年明け「大雪 100年前1888年のナイトメア」とNYタイムズの見出し。春にフィラデルフィア美術館にデュシャンの遺作などを見に出かけたが、堅固な木扉に顔をすり寄せるようにして穴の向こうの薄明りの中に浮かび上がるものを凝視するしかなかった。しかし、彼の手になる遺作制作プロセスのファイルが生誕100年記念で復刻され、入手できたことは収穫だった。チエスに没頭しながらも遺作が誤りなく設置されるためのマニュアルに驚いた。

収蔵作家紹介

櫃田伸也 Hitsuda Nobuya /1941-

東京都大田区に生まれる。1960年、東京藝術大学美術学部に入学し、油畫を専攻する。同大学院生時は、ポップアートを思わせるドットやコラージュ的な要素を使った作品を制作し、1965年から出品を始めた新制作協会展では、68年まで連続で新作家賞を受賞する。1970年、NHK美術部に入社するも1年で退職。その後、鉛筆のドローイングから、風景の作品を描いていくことになる。1975年-2001年には愛知県立芸術大学で、2001年-2009年には東京藝術大学で教鞭をとった。愛知県立芸術大学では、設楽知昭や奈良美智など、世界で活躍する作家たちを数多く育て、教育者としての顔にも光が当たっている。1984年に名古屋市芸術奨励賞、85年に安井賞を受賞する。

櫃田は、日常の風景は一点透視図法で描かれるような奥行きのあるものではなく、「横へ横へ流れている*」流動的なものであると捉え、この見方を絵画に落とし込む術を模索してきた。当館では、『棚の上のコレクション』（1977年）、『あいまいな風景』（1993年）など、年代の異なる5点の油彩作品を所蔵しており、櫃田の作風変遷を確認できる。1970年代には、升目状の壁が絵の表面を覆い、奥



櫃田伸也《通り過ぎた風景》1983年 名古屋市美術館蔵

行きの浅い画面に草花や空き缶などを写実的に描く作品を展開した。80年代には、奥行きのあるより広い風景を斜め上からの視点で描くようになり、奥行きを作り出す斜線や遠近法を無視したモチーフなどの組み合わせによって「遠景と近景が一瞬にプレスされて平面になったような風景画**」を作り上げる。90年代には、緩やかな線や曖昧な形象が目立つようになり、丸く盛り上がった山の連なりを描く作品も登場した。

身の回りの風景をよく見ることから得られた感覚を絵画に映そうとする櫃田の作品は、常に見る人の心にすっと入り込むような力を持っている。(mm)

* 櫃田伸也「通り過ぎた風景」「櫃田伸也 Recent paintings」西村画廊、1979年

** 「櫃田伸也:通り過ぎた風景」東京藝術大学出版会、2008年

EVENT

生誕160年記念 グランマ・モーゼス展 素敵な100年人生

2021年7月10日(土)－9月5日(日)



グランマ・モーゼス(モーゼスおばあさん)の愛称で親しまれ、アメリカの国民的画家として知られるアンナ・メアリー・ロバーツ・モーゼス(1860-1961)の作品と、手作りのキルトや制作の際に使用したテーブルといった愛用品や資料を紹介する展覧会を開催しました。300件近くいただいた来場者アンケートでは、作品や101歳までたくましく堅実に生き抜いたモーゼスの生き様に多くの感想が寄せられました。

今皆、幸せなのかな?

家族や地域の人々が協力して農作業を行
い、日々の暮らしを生き生きと送る姿を描いた
作品に「やさしい気持ちになった」「穏やかな
気持ちになった」「ほのぼのとして、どこか懐か
しい気持ちがした」「当たり前の暮らしに感謝
する」といった感想が多数寄せられました。そ
して、「生きるってとってもカラフルだと思いま
した。なんでもない日々も」「今皆、幸せなのか
な？欲張りすぎではと思いました。人の原点
の生活がそこにありました」という感想もあり、
作品を見て、今の暮らしや世の中のあり方を
考え直した方が多くいらっしゃいました。

人生はこれから

70歳半ばで本格的に絵を描き始め、80歳のときにニューヨークで初個展。その後の約20年間を画家として生きたモーゼスの姿に、人生の後半戦を生きる方々から「人生はこれからだと思いました」「人生がんばろう」「勇気づけられた」「まだまだ何かに挑戦できると思わせてくれました」といったコメントをいただきました。作品とともに彼女の生き方が多くの方を惹きつけたようです。

とても自由でよかったです

独学の画家であるモーゼスの絵は絵画手法にとらわれることなく、人物の顔も黒い点で目が、そして赤い筋で口が表されています。「人物の顔が精密には描かれていないが、全体を眺めると生き生きしているのが印象的」とモーゼスの作品の魅力をとらえてくださった言葉もありました。雪の輝きを表すかのように雪景色の絵の画面にキラキラと光る細粒を散らしたり、ひっかいたり、筆で絵具を立ち上げたりと、描くことに真摯であり、自由に楽しく向き合っている彼女の姿が思い浮かんできました。

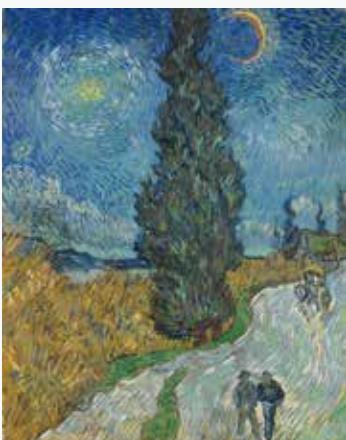
「まだまだご紹介したい言葉がありますが、最後にこの言葉を紹介します。『お会いできて光榮です。ありがとうございます。モーゼスさん』(1.)

展覽會現在進行形

ゴッホ展

響きあう魂 ヘレーネとフィンセント

2022年2月23日(水・祝)–4月10日(日)



名古屋市美術館では来年2月に始まる「ゴッホ展」ですが、第一会場の東京都美術館では一足早く9月18日(土)に開幕しました。昨年から今年にかけて、海外から作品を借り受ける展覧会が延期や中止を余儀なくされる中、オランダから72点もの作品をお借りして開幕できたことが、いまだ奇跡のように思えます。

今回のゴッホ展では、ファン・ゴッホ作品を情熱的に収集した女性コレクター、ヘーネ・クレラー＝ミュラーに焦点を当てています。彼女がコレクションをオランダ国家に寄贈したこと、現在のクレラー＝ミュラー美術館の礎が築かれました。コレクション形成の過程に着目した本展は、ヘーネが築いたクレラー＝ミュラー美術館と、ファン・ゴッホ家のコレクションを預かるファン・ゴッホ美術館の2館が誇るファン・ゴッホ作品によって構成されます。

さて、美術作品を運ぶとなると、作品だけを動かすわけにはいきません。この世に二つない大切なものですから、人が作品に付き添って運ばなければなりません。このように、作品に帯同する役割を

「クーリエ」と呼びますが、今回は日本から数名のスタッフがクーリエとしてオランダに出向いて作品を輸送し、オランダからは最少人数である2名のスタッフが来日して、展示を見守りました。

コロナ禍のため、出入国時のPCR検査に、帰国後の隔離期間など、クーリエにも様々な制約が課されます。もし検査で陽性になってしまったら？作品はどうする？など、不安は尽きません。幸い、帯同した全員が何事もなく帰国し、無事に展示を完了することができました。

こんなふうに、大変なことが多かったのは事実ですが、実際に壁に並んだ作品を前にすると、そうした苦労は脳裏に浮かばないから不思議です。ファン・ゴッホの作品には、目の前の絵画世界にずっと人を惹き込む魅力があるんですね。名古屋でファン・ゴッホに会えるまで、あと3か月。お楽しみに。(haru)

REVIEW

ジブリの大博覧会～ジブリパーク、開園まであと1年。～

2021年7月17日(土)～9月23日(木・祝) 愛知県美術館

この展覧会は、新型コロナウイルス感染症のために1年ほど延期となり、会期と副題が改められています。「ジブリの大博覧会」は、2015年に愛・地球博記念公園(愛知県営)で開催され、その後全国11ヶ所を巡回しました。展示物は2022年に同地で開園予定のジブリパークに収蔵されるため、そのまえ最後となる今回は、巡回中に加えられた展示物を新たに紹介とともにジブリパークをもりたてる企画となっています。

スタジオジブリのホームページに「これまでのジブリ作品がどのように世に出ていったのか、さまざまな試行錯誤から生み出された宣伝の軌跡を、膨大な未公開資料とともに読み解きます。(後略)」とありましたが、それに違わず、ものが作られる過程を最も良く示していたのが宣伝にかかる展示物でした。

今日では、漫画やアニメにかかる展覧会は珍しくもなく、純粋美術と呼ばれる旧来の美術表現を扱う展覧会よりも多くの集客があります。1990年に東京国立近代美術館が「手塚治虫展」を企画開催したとき、美術館が、しかも国立の、が、漫画表現を取り上げることが世間の耳目を集めました。「思想があるか」が判断の基準だと担当の研究員が論じていたと記憶しています。

ジブリに思想があるのは明らかで、展覧会はその思想を本業のアニメーションとは違うかたちで伝え、理解させようとしていることが分かります。ただ、それが美術ないしはそれと近いものでは必ずしもないことが気になります。宣伝にかかるものがそうであるように、創造にかかるものと広く捉えれば良いかもしれません。

コロナ禍での開催であり、所蔵作品を展示するコレクション展がなく、その空間が密を回避するために用いられていました。ネコバスを例にした意外なもの組み合せに創造性と変革性を見出すこの会場独自の一角に、それを補うように愛知県美術館の所蔵作品が組み込まれています。そこに愛知県美術館の美術や展覧会というものに対する思いの一片が表されていました。(み。)



会場ロビー風景 © Studio Ghibli 写真提供:愛知県美術館

飽きと知性

2021年9月4日(土)～9月26日(日) 旧門谷小学校

愛知県新城市の廃校を舞台に、2014年から1年に1度、現代美術展が開催されている。運営委員会の代表を務めるのは、同市出身の美術家である鈴木孝幸。今年は彫刻科出身の3人、柄澤健介、名倉達了、洞山舞とともに出展作家に名を連ねて、《災害を彫刻する》と題するインスタレーションを発表した。

来場者はまず校庭を二分するように設置された、目の粗い鉄格子のフェンスを眺める。玄関には、黄色いテープで何かがマークされた鳳来寺山周辺の地図。教室には、校庭で見たものと同様のフェンスが中央に立ち上がり、周囲には様々な法面が撮影された写真や、豪雨災害や土砂災害を報じた新聞記事の複写、危ういバランスで組み上げられた石などが展示される。

鈴木は常に事象を多角的に捉えようとする。東海豪雨(2000年)や七夕豪雨(1974年)の降水量のデータや被害の記録を集めつつ、豪雨を体験した人の話を聞き、現場を訪ねてその環境を自分の感覚で確かめている。取材した一連の会話や映像も作品の一部として公開した。

道路建設などのために土を削ったり盛ったりして人工的に形成された斜面を法面といい、コンクリートを吹き付ける、ネットで覆うなど、崩落や落石を防ぐ対策が施される。鈴木は、山道の多い新城市で「法面の横を

ずっと生きてきた」という。身近に存在する法面への関心から飛躍して、法面の多い土地がそもそも抱えている災害のリスク、さらには、災害の記憶はなぜ忘れられるのか、といった大きな問いにまで思考を巡らせる。

《災害を彫刻する》は、忘れてはならないことを象徴するという意味でモニュメンタルな作品である。とはいえる、統一性や重さといった一般的なモニュメントに求められる性質を備えていない。ワイヤーの張力と石の重みのバランスでかろうじて立ち上がり、向こう側の景色が透けて見える構造は、危機がいつ起こるかわからない状況や、記憶の劣化も暗示するだろう。かつて小学校だった場所で、次の世代と記憶を共有する意義と可能性が問われていたのかもしれない。(nori)



鈴木孝幸 《災害を彫刻する place / wall》(部分) 2021年

COLUMN

オンラインで楽しむ名古屋市美術館

美術作品との出会いには様々な形がありますが、最近ではネット上で作品を知る、ということも増えてきたのではないでしょうか。名古屋市美術館のコレクションにかかる新しいコンテンツを2つご紹介いたします。(KK)

その1 | 収蔵品データベース

コレクション約5700点の情報を、オンラインで検索できるようになりました。「作者一覧から探す」こともできますし、「条件を入力して探す」ではキーワードを設定して作品を見つけることができます。さらに「子ども向け」バージョンもご用意しています。こちらでは、作者やタイトル名にふりがながついており、一部の作品では「せつめい」を読むことができます。著作権の関係で画像を表示できていない作品も多いのですが、今後徐々に掲載情報を充実・拡大していく予定と考えています。詳しくは美術館ホームページ内の「コレクション」からチェックしてみてください。

<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/collection>



その2 | 音声ガイドアプリ

多言語ミュージアムガイドアプリ「マルチリンガルミュージアムガイド」を導入しました。スマートフォンやタブレット端末でコレクションの解説を視聴できる、無料の音声ガイドアプリです。今回あらたに当館の代表的な86作品の解説(日本語と英語)を収録しました。さらに、展示室内の作品だけでなく、屋外彫刻作品や建築の見どころなどを紹介しています。

このアプリはブラザーアート工業株式会社により提供されており、名古屋市科学館でもお使いいただけます。一度ダウンロードすれば全てのコンテンツをいつでもどこでもご視聴いただけるので、ぜひご活用ください。※展示室内でご利用の際は、他のお客様のご迷惑にならないようイヤホン等をご用意ください。

アプリのダウンロードはこちらから↓
<https://www.brotherearth.com/e/museum-guide/>



編集後記

早いもので今年も残りわずかとなりました。おかげさまで前号でのリニューアルはご好評をいただいたようではっとしています。さて、このアートペーパーの触り心地が良く風合いのある紙は「モンテシオン」と言います。東日本大震災に伴う津波で甚大な被害を受けた、日本製紙の石巻工場で開発され、復興支援商品としても位置づけられています。震災から10年が経ち、コロナ禍というあらたな非日常が新しい日常となりつつある昨今ですが、「あの日」を心に留め続けたいと感じています。(KK)